梢のあづく、夕榮も。

靄は苅穂のはふり衣、
夕闇とざす路遠み、
牛のうめきや、斷末魔。

〔エミイル・ゼルハアレン――『弗羅曼景物詩』〕

畏怖

北に面へるわが畏怖の原の上に、
牧羊の翁、神樂月、角を吹く。
物憂き羊小舍のかどに、すぐだちて、
災殃のごと、死の羊群を誘ふ。

きし方の悔をもて築きたる此小舍は、
かぎりもなき、わが憂愁の邦に在りて、
ゆく水のながれ薄荷莢蓯におほはれ、
いざよひの波も重きか、蜘手に澱む。

肩に赤十字ある墨染の小羊よ、
色もの凄き羊群も長棹の鞭に

撻れて歸る、たづたづし、罪のねりあし。

疾風に歌ふ牧羊の翁、神樂月よ、
今、わが頭掠めし稻妻の光に
この夕おどろおどろしきわが命かな。

〔エミイル・エルハアレン――『途上所現』〕

火宅

嗚呼、爛壞せる黄金の毒に中りし大都會、
石は叫び烟舞ひのぼり、
驕慢の圓蓋よ、塔よ、直立の石柱よ、
虚空は震ひ、勞役のたぎち沸くを、
好むや、汝、この大畏怖を、叫喚を、

あはれ旅人、
悲みて夢うつつら離りて行くか、濁世を
つゝむ火焔の帶の停車場。
中空の山けたゝましく跳り過ぐる火輪の響。
ながの胸を焦す早鐘、陰々と、とよもす音も、

この夕、都會に打ちぬ。炎上の焔、赤々、
千萬の火粉の光、うちつけに面を照らし、
聲黑きわめき、さけびは、妄執の心の矢聲。
滿身すべて瀆聖の言葉に捩れ、
意志あへなくも狂瀾にのまれをはんぬ。
實に自らを矜りつゝ、將、咀ひぬる、あはれ、人の世。

〔エミイル・ヱルハアレン——『騷擾』〕

時鐘

舘の闇の靜かなる夜にもなれば訝しや、
廊下のあなた、かたゝと桜杖のおと、杖の音、
「時」の階のあがりおり、小股に刻む音なひは
これや時鐘の忍足。

硝子の蓋の後には、白鐵の面飾なく、
花形模様色褪めて、時の數字もさらぼひぬ。
人の氣絶えし渡殿の影ほのぐらき朧月よ、
　　これや時鐘の眼の光。

うち沈みたるねぬ聲に機のおもり、音ひねて、
槌に鑢の音もかすれ、言葉悲しき木の函よ、

細身の秒の指のおと、片言まじりおぼつかな、
　　これや時鐘の針の聲。

角なる函は樫づくり、焦茶の色の框はめて、
冷たき壁に封じたる棺のなかに隱れすむ
「時」の老骨、きしきしと、數嚙む音の齒ぎしりや、
　　これぞ時鐘の恐ろしさ。

げに時鐘こそ不思議なれ。
あるは、木履を曳き惱み、あるは徒跣に音を竊み、
忠々しくも、いそしみて、古く仕ふるはした女か。
杜時鐘を見詰むれば、針のコムパス、身の搾木。

「エミイル・ゼルハアレン　『路傍』」

黄昏

夕暮がたの蕭やかさ、燈火無き室の蕭やかさ。
かはたれ刻は蕭やかに、物靜かなる死の如く、
朧々の物影のやをら浸み入り廣ごるに、
まづ天井の薄明、光は消えて日も暮れぬ。

物靜かなる死の如く、微笑作るかはたれに、
曇れる鏡よく見れば、別の手振うれたくも
わが俤は蕭やかに、辷り失せなむ氣色にて、
影薄れゆき、色蒼み、絶えなむとして消つべきか、

壁に掲けたる油畫に、あるは朧に色褪めし、
框をはめたる追憶の、そこはかとなく留まれる

人の記憶の圖の上に心の國の山水や、
筆にゑがける風景の黑き雪かと降り積る。

夕暮がたの蕭やかさ。あまりに物のねびたれば、
沈める音の絃の器に、桙をかけたる思にて、
無言を辿る戀なかの深き二人の眼差も、
花毛氈の唐草に絡みて縋るゝ夢心地。

いと徐ろに日の光隱ろひてゆく蕭やかさ。
文目もおぼろ、蕭やかに、噫、蕭やかに、つくねんと、
沈默の鄕の偶座は一つの香にふた色の
匂交れる思にて、心は一つ、えこそ語らね。

「ジョルジュ・ロオデンバッハ――『沈默鄕』」

銘文

夕まぐれ、森の小路の四辻に
夕まぐれ、風のもなかの逍遙に、
竈の灰や、歲月に倦み勞れ來て、
定業のわが行末もあらま弓、
杖と佇む。

路のゆくてに「日」は多し、
今更ながら、行きてむか。
ゆふべゆふべの旅枕、
水こえ、山こえ、夢こえて、
つひのやどりはいづかたぞ。
そは玄妙の、静寧の「死」の大神が、

わがまなこ、閉ぢ給ふ國、
黄金の、浦安の妙なる封に。

高樫の寂寥の森の小路よ。
岩角に懈怠よろぼひ、
きり石に足弱悩み、
歩む毎、

きしかたの血潮流れて、
木枯の颯々たりや、高樫に。
噫、われ倦みぬ。

赤楊の落葉の森の小路よ。
道行く人は木葉なす、
蒼ざめがほの耻のおも、

ぬかりみ迷ひ、群れゆけど、
かたみに避けて、よそみがち。
泥濘の、ゐたゝりの森の小路よ、
憂愁を風は葉並に囁ぎぬ。
ゐろがねの、月代の霜さゆる隱沼は
たそがれに、この道のはてに澱みて
げにこゝは「鬱憂」の

鬼が栖む國。

秦皮の、眞砂、いさごの、森の小路よ、
微風も足音たてず、
梢より梢にわたり、
山蜜の色よき花は
金色の砂子の光、

おのづから曲れる路は
人さらになぞへを知らず、
このさきの都のまちは
まれびとを迎ふときゝぬ。
いざ足をそこに止めむか。
あなくやし、われはえゆかじ。
他の生の途のかたはら、

「物影」の亡骸守る
わが「願」の通夜を思へば。

高樫の路われはゆかじな、
秦皮や、赤楊の路、
日のかたや、都のかたや、水のかた、
なべてゆかじな。

噫、小路、
血やにじむわが足のおと、
死したりと思ひしそれも、
あはれなり、もどり來たるか、
地響のわれにさきだつ。
噫、小路、
安逸の、醜辱の、驕慢の森の小路よ、

あだなりしわが世の友か、吹風は、
高樫の木下蔭に
聲はさやさや、
涙さめざめ。

あな、あはれ、きのふゆゑ、夕暮悲し、
あな、あはれ、あすゆゑに、夕暮苦し、

あな、あはれ、身のゆゑに、夕暮重し。

〔アンリ・ド・レニエ――『夢路』〕

愛の教

いづれは「夜」に入る人の
をさな心も青春も、
今はた過ぎしけふの日や、
從容として、ひとりきく、
「冬篳篥」にさきだちて、

「秋」に響かふ「夏笛」を。
(現世にしては、ひとつなり、
物のあばれも、さいはひも。)
あゝ、聞け、樂のやむひまを
「長月姫」と「葉月姫」、
ながら「憂愁」と「歡樂」と
語らふ聲の蕭やかさ。

（熟しうみたるくだもの、
つはりて、枝や撓むらむ。）
あはれ、微風、さやさやと
伊吹のすゑは木枯を
誘ふと知れば、憂かれども、
けふ木枯もそよ風も
口ふれあひて、熟睡せり。

森陰はまだ夏緑、
夕まぐれ、空より落ちて、
笛の音は山鳩よばひ、
「夏」の歌「秋」を搖りぬ。
曙の美しからば、
その晝は晴れわたるべく、
心だに優しくあらば、

身の夜も樂しかるらむ。
ほゝゑみは口のさうび花、
もつれ髪、髷にゆふべく、
眞清水やいつも澄みたる。
あゝ人よ、「愛」を命の法とせば、
星や照らさむ、なが足を、
いづれは「夜」に入らむ時。

〔アンリ・ド・レニエ――『田園清興』〕

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤは金工の如くアンリ・ド・レニエは織人の如し。また、譬喩を珠玉に求めむか、彼には青玉黄玉の光輝あり、此には乳光柔き蛋白石の影を浮べ、色に曇るを見る可し。

〔譯者〕

花冠

途のつかれに項垂れて、
默然たりや、おもかげの
あらはれ浮ぶわが「想」。
命の朝のかしまだち、
世路にほこるいきほひも、

今、たそがれのおとろへを
透しみすれば、わなゝきて、
顏背くるぞ、あはれなる。
思ひかねつゝ、またみるに、
避けて、よそみて、うなだるゝ、
あら、なつかしのわが「想」。

げにこそ思へ「時」の山、
山越えいでゝ、さすかたや、
「命」の里に、もとほりし
ながら足音もきのふかな。

さて、いかにせし、盃に
水やみちたる。としごろの

願の泉はとめたるか。
あな空手、唇乾き、
とこしへの渇に苦める
いと冷やき笑を湛へて、
ゆびさせる其足もとに、
玉の屑、埴土のかたわれ。

つぎなる汝はいかにせし、
こはすさまじき姿かな。
そのかみの藹たき風情、
嫋竹の、あえかのなれも、
鈍なりや、宴のくづれ、
みだれ髪、肉おきたるみ、
酒の香に、衣もなよびて、

蹈む足も醉ひさまだれぬ。
あな忌々し、とく去ねよ、

さて、また次のなれが面、
みれば麗容うつろひて、
悲、削ぎしやつれがほ、
指組み絞り胸隱くす

双の手振の怪しきは、
饐えたる血にぞ、怨恨の
毒ながすなるくちぬを
掩はむためのすさびかな。

また「驕慢」に音づれし
なが獲物をと、うらどふに、

えび染のきぬは、やれさけ、
笏の牙も、ゆがみたわめり。
又、なにものぞ、ほてりたる
もろ手ひろげて「樂欲」に
らうがはしくも走りしは。
酔狂の抱擁酷く
唇を嚙み破られて、

滿面に爪あとたちぬ。
興ざめたりな、このくるひ、
われを棄つるか、わが「想」
あはれ、耻かし、このみざま、
なれみづからをいかにする。

ちかはあれども、そがなかに、

行清きたゞひとり、
きぬもけがれと、はだか身に、
出でゆきしより、けふまでも、
あだし「想」の姉妹と
道異なるか、かへり來ぬ
——あゝ行かばやな——汝がもとに。
法苑林の奥深く

素足の「愛」の玉容に
なれは、ゐよりて、睦みつゝ、
靈華の房を摘みあひて、
うけつ、あたへつ、とりかはし
双の額をこもごもに、
飾るや、一の花の冠

〔アンリ・ドゥ・レニエ――『埴土の圓牌』〕

延びあくびせよ

延びあくびせよ、傍に「命」は倦みぬ、
朝明より夕をかけて熟睡する
その藹たげさ勞らしさ、
ねむり眼のうまし「命」や。
起きいでよ、呼ばゝりて、過ぎ行く夢は

大影の奥にかくれつ。
今にして躊躇なさば、
ゆく末に何の導ぞ。
呼ばゝりて、過ぎ行く夢は
去りぬ神祕に。

いでたちの旅路の糧を手握りて、

歩もいとゞ速まさる
愛の一念ましぐらに、
急げ、とく行け、
呼ばゝりて、過ぎ行く夢は、
夢は、また歸り來なくに、

進めよ、走せよ、物陰に、

畏をなすか、深淵に、
あな、急げ……あゝ遅れたり。
はしけやし「命」は愛に熟睡して、
栲綱の白腕になれを巻く。
――噫遅れたり、呼ばゝりて過ぎ行く夢の
いましめもあだなりけりな。
ゆきずりに、夢は嘲る……

さるからに、
むしろ「命」に口觸れて
これに生ませよ、藝術を。
無言に禱るかの夢の
教をきかで、無邊なる神に憧るゝ事なくば。
たちかへり、色よき「命」かき抱き、

なれが刹那を長久にせよ。
死の憂愁に歡樂に
靈妙音を生ませなば、
なが亡き後に殘りゐて、
はた、さゞめかむ、はた、なかむ、
うれしの森に、春風や
若綠、

去年を繰返の愛のまねぎに。
さればぞ歌へ微笑の榮の光に。

〔井エレ・グリフィン――『命の光』〕

伴奏

白銀の筐柳菩提樹や、榛の樹や……
水の面に月の落葉よ……

夕の風に櫛けづる丈長髪の匂ふごと、

夏の夜の薫なつかし、かげ黑き湖の上、
水薫る淡海ひらけ鏡なす波のかゞやき。

楫の音もうつらうつらに
夢をゆくわが船のあし。

船のあし、空をもゆくか、
かたちなき水にうかびて。

ならべたるふたつの櫂は
「徒然」の櫂「無言」がい。

水の面の月影なして

波の上の楫の音なして
わが胸に吐息ちらぼふ。

〔アルベエル・サマン——『詩集』〕

賦

色に賞でにし紅薔薇、日にけに花は散りはてゝ、
唐棣花色よき若立も、季ことごとくあめあへず、
そよそよ風の手枕に、はや日數經しけふの日や、
つれなき北の木枯に、河氷るべきながめかな。

噫、歡樂よ、今さらに、なじかは、せめて爭はむ。
知らずや、かゝる雄誥の、世に類無く鳴滸なるを。
ゆゑだもなくて、徒に痴れたる思、去りもあへず、
「悲哀」の琴の絲の緒を、ゆし按ずるぞ無益なる。

*

ゆめ、な語りそ、人の世は悅おほき宴ぞと。

そは愚かしきあだ心、はたや卑しき痴れごゝち。
ことに歎くな、現世を涯も知らぬ苦界よと。
益無き勇の逸氣は、たゞいち早く悔いぬらむ。

春日霞みて、葦蘆のさゞめくが如、笑みわたれ。
磯濱かけて風騒き波おとなふがごと、泣けよ。
一切の快樂を盡し、一切の苦患に堪へて、

豐の世と稱ふるもよし、夢の世と觀ずるもよし。

*

死者のみ、ひとり吾に聽く、奥津城處、わが栖家。
世の終るまで、吾はしも己が心のあだがたき。
忘恩に榮華は盡きむ、里鴉畠をあらさむ、
收穫時の頼なきも、吾はいそしみて種を播かむ。

ゆめ、自らは悲まじ。世の木枯もなにかあらむ、
あはれ侮蔑や、誹謗をや、大凶事の迫害をや。
たゞ、詩の神の壁篌の上、指をふるれば、わが樂の
日毎に清く澄みわたり、靈妙音の鳴るが樂しさ。

*

長雨空の喪過ぎて、さすや忽ち薄日影、
冠の花葉ふりおとす栗の林の枝の上に、
水のおもてに、遲花の花壇の上に、わが眼にも、
照り添ふ匂なつかしき秋の日脚の白みたる。

日よ何の意ぞ、夏花のこぼれて散るも惜からじ、
はた禁めえじ、落葉の風のまにまに吹き交ふも。

水や曇れ、空も鈍びよ、たゞ悲のわれに在らば、
想はこれに養はれ、心はためにに勇をえむ。

*

われは夢む、滄海の天の色、哀深き入日の影を、
わだつみの灘は荒れて、風を痛み、甚振る波を、
また思ふ釣船の海人の子を、巖穴に隱ろふ蟹を、

青眼の子アイヲを、グラウコス、プロオティウスを。
又思ふ、路の邊をあさりゆく物乞の漂浪人を、
栖み慣れし軒端がもとに、休ひゐる賤が翁を、
斧の柄を手握りもちて、肩かゞむ杣の工を、
げに思ひいづ、鳴神の都の騷擾、村肝の心の痍を。

この一切の無益なる世の煩累を振りすてゝ、
もの恐ろしく汚れたる都の憂あとにして、
終に分け入る森陰の清しき宿求めえなば、
光も澄める湖の静けき岸にわれは悟らむ。

否、寧われはおほわだの波うちぎはに夢みむ。

*

幼年の日を養ひし大搖籃のわだつみよ、
ほだしも波の鷗鳥、呼びかふ聲を耳にして、
磯根に近き岩枕汚れし眼、洗はゞや。

噫いち早く襲ひ來る冬の日、なにか恐るべき。
春の卯月の贈物、われはや、既に盡し果て、

秋のみのりのえびかづら葡萄も摘まず、新麥の
豐の足穗も、他し人、苅り干しにけむ、いつの間に。

二三四

けふは照日の映々と青葉高麥生ひ茂る
大野が上に空高く靡びかひ浮ぶ旗雲よ。
和ぎたる海を白帆あげて、朱の曾保船走るごと、
變化乏しき青天をすべりゆくなる白雲よ。

時ならずして、汝も亦近づく暴風の先驅と、
みだれ姿の影黑み蹙める空を翔りゆかむ、
嗚呼、大空の馳使、添はゞや、なれにわが心、
心は汝に通へども、世の人たえて汲む者も無し。

〔ジャン・モレアス——『詩集』〕

嗟嘆

靜かなるわが妹、君見れば、想すゞろぐ。
朽葉色に晩秋の夢深き君が額に、
天人の瞳なす空色の君がまなこに、
憧るゝわが胸は、苔古りし花苑の奥、
淡白き吹上の水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨月、清らなる色に曇りて、
時節のきはみなき欝憂は池に映ろひ
落葉の薄黄なる憂悶を風の散らせば、
いざよ、ひの池水に、いと冷やき綾は亂れて、
ながながし梔子の光さす入日たゆたふ。

〔マラルメ——『詩集』〕

物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡、自から心象の飛揚する時は「歌」成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かるが故に、其詩、幽妙を虧く、人をして宛然自から創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を沒却するものなり。讀詩の妙は漸々遲々たる推度の裡に存す。暗示は卽ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徵と名づく。一の心狀を示さむ

が爲、徐に物象を喚起し、或は之と逆まに、一の物象を採りて、闡明數番の後、これより一の心狀を脫離せしむる事これなり。

〔ステファンヌ・マラルメ〕

白楊

落日の光にもゆる
白楊の聳やく並木、
谷隈になにか見る、
風そよぐ梢より。

〔オオバネル——『詩集』〕

故國

小鳥でさへも巣は戀し、
まして青空、わが國よ、
うまれの里の波羅葦增雲。

〔オオバネル——『詩集』〕

海のあなたの

海のあなたの遙けき國へ
いつも夢路の波枕、
波の枕のなくなくぞ、
こがれ憧れわたるかな、
海のあなたの遙けき國へ。

〔オオバネル―『詩集』〕

オオバネルは、ミストラル、ルウマニユ等と相結で、十九世紀の前半に近代プロヴァンス語を文藝に用ゐ、南歐の地を風靡したるフェリイブル詩社の翹楚なり。

「故國」の譯に波羅韋增雲とあるは、文錄慶長年間、葡萄牙語より轉じて一時、わが日本語化したる基督教法に所謂天國の意なり。

〔譯　者〕

解悟

頼み入りし空なる幸の一つだにも。忠心ありて、
とまれるはなし。
そをもふと、胸はふたぎぬ、悲にならはぬ胸も
にがき憂に。

きしかたの犯の罪の一つだにも、懲の責を
のがれしはなし、
そをもふと胸はひらけぬ、荒屋のあはれの胸も
高かき望に。

〔アルトゥロ・グラアフ――『美都波女』〕

篠懸

白波の、潮騒のおきつ貝なす
青緑しげれる谿を
まさかりの眞畫ぞ知す。
われは昔の野山の精を
まなびて、こゝに宿からむ、

あゝ、神寂びし篠懸よ、
なれがにはひの濡髪に。

〔ダンヌンチオ——『新謠』〕

海光

兒等よ、今晝は眞盛、日こゝもとに照らしぬ。
寂寞大海の禮拜して、
天津日に捧ぐる香は、
淨まはる潮のにほひ、
轟ぐ波凝、動がぬ岩根、靡く藻よ、

黑金の船の舳先よ、
岬代赭色に、獅子の蹈留れる如く、
足を延べたるこゝ、入海のひたおもて、
うちひさす都のまちは、
煩悶の壁に惱めど、
鏡なす白川は蜘手に流れ、
風のみひとり、たまさぐる、

洞穴口の花の錦や。

〔ダンヌンチオ――『讃歌』〕

海潮音をはり

明治三十八年十月十日印刷　海潮音奥付
明治三十八年十月十三日發行

定價金壹圓

譯者　上田敏

發行者　東京市本郷區駒込東片町廿六番地　吉田正太郎

印刷人　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地　今井鐵次郎

印刷所　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地　今井活版所

發行所　東京市本郷區駒込東片町廿六番地　本郷書院

賣捌　東京堂、上田屋、前川文榮閣、林平次郎、東海堂、北隆館、良明堂、大阪吉岡、杉本書店、久留米菊本、名古屋川瀬、星野文星堂、其他各書林

不許複製

與謝野鐵幹君合著
與謝野晶子君
上田敏君序
馬場孤蝶君跋
藤島武二君畫

内海月杖君序
薄田泣菫君跋

毒草

四六六方形美本◎紙數百參餘◎特製(表紙クロース製)定價金七拾錢◎洋裝並製金五拾錢◎郵税各金六錢◎市内小包料五錢◎製本既成

この夫妻の新しき詩文集を「毒草」と云ふ。知らず、讀む人をして醉はしむるや、睡らしむるや。躍りたたしむるや。唯見る、紅紫の花月もあやに、砂香蒸すばかり爛りぬ。初版早々盡きて、こゝに增補訂正第三版を出だせり。

大學教授 芳賀矢一先生校訂
文學博士
大學助教授 藤岡作太郎先生序文
文學士
文學士 佐藤芝峰先生著

英燭對譯

小倉百首評釋

定價金四拾錢
郵便税四錢

小倉百首一度出でしより爰に幾百歳、竜田吉野の花紅葉、宛として机上一册に匂ふの觀あり。文學士芝峰君、優麗婉婉の筆を以て之を釋し、英獨兩譯を加へて批言最も剴當を推す。文の妙、評の巧、即時の文界多く其例を見ざる所也。和歌を嗜むの士、語學を修むるの人、盍んぞ此書を閲せずして可ならんや。冒頭添ふる所の總論一篇、最も著者の識見を伺ふに足る。幸に一讀を玉へ。

春鳥集

蒲原有明著

裝訂意匠●挿畫●青木繁君

定價金七十錢●郵税六錢

著者の詩は徒らに新奇を衒ふものにあらず。たゞ舊慣に甘んじ難きものありて、直に著者が胸裡に向て、そが餘孽を絶たむとする努力なり、隨てまた懺悔なり。こゝに精苦の作を試み長短積で漸く三十有餘篇を成しぬその多くは尋常敍情詩の陳域を脱して更に別途に出でたるものなり。著者はまた卷頭の自序に於て志すところの什一を敍べたり

新時代第二版

山川登美子君
増田まさ子君
與謝野晶子君

合作

人

もろこし戀

中澤弘光君畫

山川登美子、增田雅子、與謝野晶子の三女史は、多年新詩社の詩名夙く「明星」紙上に顯れ、近時我國短詩型の潮流いと新らしきものあるは、實に女史者首唱の力多き由なり。わが書院叢に「若草」を出だしし、今また切に三女史が此集を得たり。與謝野女史は既に二三の著あり。山川、增田二女史に至りては、この集を以て初めてその詩才を窺ふべし、世を擧げて功利に趨り、文藝の眞價を知らず、苦心を以て詩歌美術を律せんとする時に當り、明晰纖指の口吻を以て詩歌を稱する者、往々僞善者ども、人間の榮譽、生命、まことを見るは詩界の偉觀なるのみならず、人間の榮譽、生命、まことを悟るべきなり。

◎本版◎紙壹敦◎東京市麻布区東片町百三十二番地
定價金壹圓四十錢
◎郵税拾四錢◎印刷費六十錢

發兌元　本郷書院

文學士　久保天隨著

評釋日本絶句選

定價三十錢
郵税四錢

人を以てすれば四十家、詩を以てすれば百首、菅公謫居の詠より以上、人口に膾炙する古今の名吟佳什大抵網羅して剩すなく、加ふるに、評釋の文、流麗婉美、一講すれば齒牙の香三日失せず。明窓淨凡の上必ずこの好伴侶なかる可からず、敢て世上才人の一讀を勸む

本郷書院出版目録

文學士　尾上柴舟著
柴崎恒信畫

金帆

定價金四十錢
郵税四錢

先生は溫順快活の人、其詩また流麗曲雅、當今佶屈贅牙澁怪奇を以て詩の能事とする風潮の中に起つて恰も熱砂の中を逝く一筋の清流のごとくすら〳〵としたる風趣を以て一種獨特の新聲を試みたる此書收むる處四行詩、長詩、譯詩數十篇皆雋秀瑰麗西詩の眞髓を得て更に一歩を進めたるものこれ眞に現今詩壇の一明星也、曉鐘なり

◎初版忽ち賣切　再版出來

本郷書院出版目錄

滑稽笑話

文學士 蜷川石水
工學士 渡邊清江 共著

定價金廿五錢
郵稅四錢

新式の滑稽笑話○著者は工學士と文學士とで共に赤帽の兵隊さんである。話は總て嶄新奇拔で、滑稽笑話願を解くまに〳〵人生百般のこと〻特に時局に關して、諷刺的訓戒的の新趣を漏して居る。紳士淑女諸君是非一本を購つて、新式の滑稽文學を御覽なさい。

初版忽ち賣切 三版

西吟新譯

文學士 小原無絃先生譯

近刻

本書は西歐詩聖○ウチーヅウチース○スコット○フレチャー○ヒーマンス夫人○カメル○ヘリック○ハイロン○バンス○ゲイ○ブラウニング夫人○ローガン○ロングフエロー○ユーゴー○テニソン等の名吟玉咏を小原文學士の彩筆を以て新詩型に譯せしもの也、西歐文學の精華を味はんとするの士は須く一本を座右に供へざるべからず

花の詩

文學士 小原無絃譯

本書歐米各國大家の名吟玉咏中より傑作花の詩を小原文學士叮嚀親切に譯せしもの幸に男女學生諸君一讀を賜へ

本郷書院出版目錄

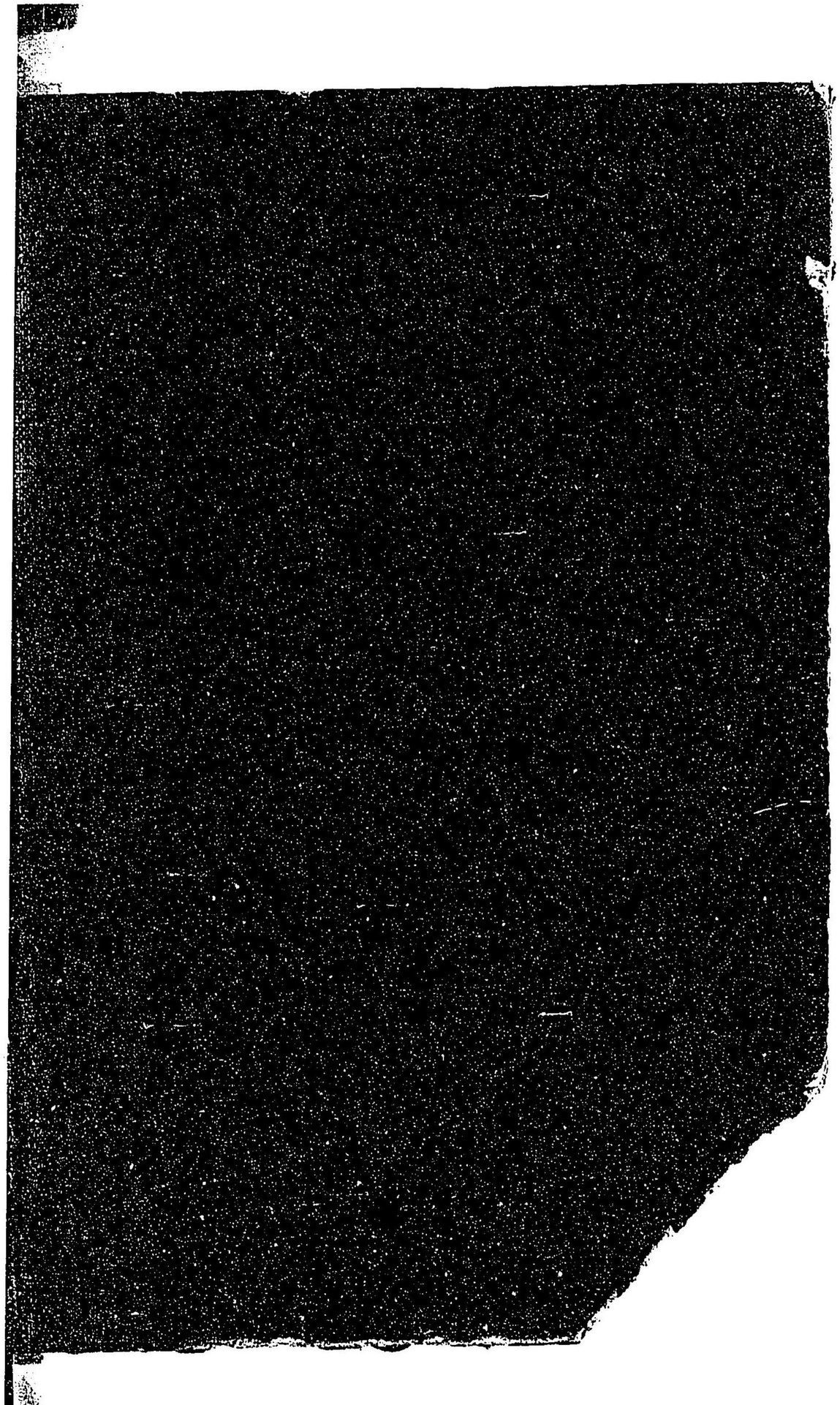
文學士 越迺背山著
時代笑話 **滑稽文學** 定價金廿五錢 郵稅四錢

文學士 小原無絃著
ユーゴーの詩 近刻

文學士 尾上柴舟著
森の歌 近刻

文學士 佐藤芝峯編
美文韻文 **筆のあと** 附作文大要

98
192



98
192

100899-000-2

98-192

海潮音

上田　敏/訳

M38
DBY-0148